

「復興の森林」高原に

新燃岳噴火 町、来月500本植樹

新燃岳噴火による災害からの復興の証しにと、高原町が火口から約7キロの山に「復興の森林」をつくる計画を進めている。2月26日に町内外の市民らが植樹し、事業費の約270万円は、全国から寄せられた募金の一部を使う。

に近い大谷地区の町有林（約2500平方メートル）内で、火砕流の避難地域にも指定されている場所という。地元の住民や小学校の児童らがイチイガシやブナなどの広葉樹約500本を植える。記念碑も建て、昨年1月下旬の大噴火の状況を写真などで説明する。

植樹には、環境問題に携わる東京のNPO法人が呼びかけた木のオーナー制度に賛同した約40人も参加する予定という。

町農政畜産課の森山業係長は「灰をかぶっても木が育ち、森が成長する様子を復興の証しとし、子どもたちにも引き継いでもらいたい」。オーナー制度の参加者とは継続的な交流も期待しており「全国の人にも復興を見守ってもらえる」と歓迎している。（知能哲郎）

